

Title	沖縄系エスニックコミュニティにおける日本語と沖縄方言の継承意識：ブラジル及びボリビアの言語生活調査から
Author(s)	朴, 秀娟; 森, 幸一; 工藤, 真由美
Citation	阪大日本語研究. 2013, 25, p. 1-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50083
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

沖縄系エスニックコミュニティにおける日本語と沖縄方言の継承意識
 —ブラジル及びボリビアの言語生活調査から—

Attitudes toward the succession of the Japanese language and the Okinawan dialect within the
 Okinawan communities in Brazil and Bolivia

朴 秀娟・森 幸一・工藤 真由美

PARK Sooyun・MORI Koichi・KUDO Mayumi

キーワード：日本語の継承、日本人教育、沖縄方言の継承、ウチナーンチュ、アイデンティティ

要旨

本稿では、白岩ほか（2011）に引き続き、ブラジルとボリビアの沖縄系エスニックコミュニティにおける言語生活調査結果の分析を行った。3世でも日本語が保持されているボリビアに対し、ブラジルでは、2世においてポルトガル語へのモノリンガル化が進んでいる。しかし、ブラジルでは、日本語の継承意識だけでなく、沖縄方言の継承意識も強く、「沖縄系日系人としてのアイデンティティ」を重視している。

1. はじめに

白岩ほか（2011）では、ブラジルとボリビアにおける沖縄系エスニックコミュニティで実施した言語生活調査のうち¹⁾、日本語と沖縄方言の使用意識と能力意識に関する項目を分析した。次の図表に示すように、ブラジルのサンパウロ市ビラカロン地区の沖縄系エスニックコミュニティでは、2世においてポルトガル語へのモノリンガル化が進んでいるが、ボリビアのオキナワ移住地のエスニックコミュニティでは、2世であっても、日本語のみならず沖縄方言も保持されている（図表は、白岩ほか2011のP.29より抜粋²⁾）。

【ブラジル・都市沖縄系エスニックコミュニティ】

	1世成人 →→	1世子ども（準2世）→→	2世→→	3世
	日本国籍 商業	日本国籍 商業	ブラジル国籍 商業・事務職・技術職 高学歴・ブラジル公教育重視	
日本語	○	○	×	×
沖縄方言	○	△	×	×
ポルトガル語	△	○	○	○

【ボリビア・農村沖縄系エスニックコミュニティ】

	1 世成人 →→ 1 世子ども (準 1 世) →→	2 世 →→	3 世
	日本国籍 農業	日本国籍 農業	日本・ボリビア二重国籍 農業 ボリビア人と隔離した二元的教育
日本語	○	○	○
沖縄方言	○	△	×
スペイン語	△	○	○

本稿は、白岩ほか (2011) に引き続き、ブラジルとボリビアの沖縄系エスニックコミュニティにおける言語生活調査の結果に基づいて、両コミュニティにおける日本語学習歴の違いと、日本語及び沖縄方言の継承意識を分析するものである。両コミュニティでは、2世において大きな違いが見られることから、2世を中心に分析していくことにする。

本稿の構成は次のとおりである。まず、第2節で、談話録音調査結果の一部を紹介する。第3節で、言語生活調査の概要を述べ、第4節で、日本語と沖縄方言の使用意識と能力意識の違いを簡略にまとめた上で、第5節において、両コミュニティにおける日本語能力意識の違いが日本語学習歴の違いと相関していることを述べる。そして、第6節で、日本語と沖縄方言の継承意識について述べる。最後に、第7節で本稿のまとめと今後の課題を述べる。

2. 談話録音調査結果の概要

ボリビアの沖縄系エスニックコミュニティでは、2世であっても、日本語のみならず沖縄方言が保持されていることは、言語生活調査だけでなく、談話録音調査からも確認できる。次は、工藤編 (2012) から、ボリビアの2世同士の会話の一部を抜粋したものである (発話の日本語部分はカタカナで、現地語による部分はアルファベットで記し、括弧内に標準語訳を示す³⁾。話者番号は工藤編 (2012) における番号を使用している)。1) は日本語中心の会話で、談話①は40代の2世同士の会話、談話②は20代の2世同士の会話である。2) は沖縄方言中心の会話で、40代の2世同士の会話である。

1) 日本語中心の会話

談話①⁴⁾ (工藤編 2012 : 91~92)

[話者情報]

H : オキナワ第一移住地在住。2世。1964年生まれ (収録当時 42歳)。男性。オキナワ第

一移住地生まれ。二重国籍。収録当時の職業は農業・工場経営。

I: オキナワ第一移住地在住。2世。1964年生まれ(収録当時42歳)。男性。オキナワ第一移住地生まれ。二重国籍。収録当時の職業は農業。

H: アップダウンガ アルカラネ、ノーギョーフ。イチリツデ ミンナガ…

(アップダウンがあるからね、農業は。一律でみんなが…)

I: オナジ パターンジャナイカラネ、マイネン。

(同じパターンじゃないからね、毎年。)

H: ウン、ウン。マイカイ イチリツダッタラ イーンダケドネ。ソーモ イカナイカ、ノガ ノーギョーカナ。テンキト キョーエーキョーゾン⁵⁾。マ、アノー、ノーギョー タノシモーツテ イツテモ、カナリ タノシメナイネ、サイキンネ。ミズワ クルワ、カゼワ クルワ。

(うん、うん。毎回一律だったらいいんだけどね。そうもいかないのが農業かな。天気と共栄共存。ま、あの一、農業を楽しもうって言っても、かなり楽しめないね、最近ね。水は来るわ、風は来るわ。)

I: ケツソンサエ シナケレバ、モー、タノシメルケドネ。

(欠損さえしなければ、もう、楽しめるけどね。)

H: ソーダネー。ウン、ナントカ。ナントカ、アノー、モー、ネガウシカ ナイデショ、コレワ。ジブンタチデ コントロール デキナイトコロダカラネ。

(そうだねー。うん、何とか。何とか、あの一、もう、願うしかないでしょ、これは。自分達でコントロールできないところだからね。)

I: ウン。

(うん。)

H: マ、デモ、ウン、モー マイカイ スタートラインワ イッショダカラ、イッキサク、スタートラインニ タツテ、ゴールワ ヒトツダカラ、モー マイカイ ソレオ メザスシカナイデショ。スタートラインニ タツテ、マタ ゴール メザシテ、スタートラインニ タツテ、ゴール メザシテ。クリカエシダヨネ。

(ま、でも、うん、もう毎回スタートラインは一緒だから、一期作、スタートラインに立って、ゴールは一つだから、もう毎回それを目指すしかないでしょ。スタートラインに立って、またゴール目指して、スタートラインに立って、ゴール目指して。繰り返すだけだね。)

I: ソレ、バク、バクチノ、バクチノ スキナ セーカツダヨ。

(それ、博打の、博打の好きな生活だよ。)

H: {笑い} ソーダネー。バクチナンダケド、ウーン、ヨノナカデ サダメラレタ バクチナンダケド、ヒャクショーワ、ノーギョーワ。

({笑い} そうだねー。博打なんだけど、うーん、世の中で定められた【世間で認められている】博打なんだけど、百姓は、農業は。)

I: マ、バクチワ ウンニ マカセタ アレナンダケレドモ、ノーギョーワ ウンダケジャナイカラナ。

(ま、博打は運に任せたあれなんだけれども、農業は運だけじゃないからな。)

H: ソーダネー。マタ イロンナ ヨーソモ フクマレテ、イカニ リスクオ スクナメニ スルカッテユーノガ マタ ヒトツノ シゴトダカラネ、ノーギョーワ。タノシートコロモ アレバ キビシートコロモ アルカラ、ソノヘンノ クミアワセダネー。
(そうだねー。またいろんな要素も含まれて、いかにリスクを少なめにするかっていうのがまた一つの仕事だからね、農業は。楽しいところもあれば厳しいところもあるから、その辺の組み合わせだねえ。)

談話②⁶⁾ (工藤編 2012 : 100~101)

[話者情報]

J: オキナワ第一移住地在住。2世。1983年生まれ(収録当時23歳)。男性。オキナワ第一移住地生まれ。ボリビア国籍⁷⁾。収録当時は学生。

K: オキナワ第一移住地在住。2世。1978年生まれ(収録当時28歳)。男性。オキナワ第一移住地生まれ。ボリビア国籍。収録当時の職業は農業・自営業。

J: ハシッテルノニ アタッテルカラ。(K: アー) ダカラ ボン、ボンツツッテカラ マエニ デテルワケ。

(走ってるのに当たってるから。(K: あー) だからボン、ボンといって【自分の体が】前に出てるんだ。)

K: ウーン。イッシュンデ?

(うーん。一瞬で?)

J: イッシュン、イヤー、イッシュン、イヤ オレ オボエテネーヨ アンマリ。Yo, (K: ウン ウン) ア、アレ ナニー、ヤッパ、ドンシテカラ、ゴロンテシ、マエニ オチタ

ッテ カンジダカラ。

(一瞬、いやー、一瞬、いやおれ覚えてないよ、あんまり。(ス) 俺、(K: うんうん) あ、あれ何一、やっぱ、ドンとぶつかって、ゴロンとして、前に落ちたって感じだから。)

K: ナニダッタカネ、アノー、carretón ト ショーメンショートツシタ… {2人の笑い} オートバイ スグ アッカシ ナッテヨ。{笑い} オモシロカッタ、アレ。(J: アー) ダカラ オドロイタノヨ、ダカラ。アレ、ホントニ、ソー、ジメンニ イルノ キヅカナカッタ。(J: ソー) ミタラ マックラデ ナンカ ホシガ ミエルカラ、「エ？」ッテ アタマ サワッターラ、「ア、イキテルヤ」ッテ。{笑い}

(何だったかね、あの一、(ス) 荷台車と正面衝突した… {2人の笑い} オートバイがそのままだめに【動かなく】なってよ。{笑い} おもしろかった、あれ。(J: あー) だから驚いたのよ、だから。あれ、ほんとに、んー、地面にいるの気づかなかった。(J: んー) 見たら真っ暗でなんか星が見えるから、「え？」って頭触ったら、「あ、生きてるや」って。{笑い})

J: ホントヨネ、ナンカ ヒトリテカ、デモ オレ サイショニ ビックリシタノワ オレ、カノジョ、コロシタノカト オモッタヨ ホントニ。

(ほんとだよね、なんか1人というか、でも俺最初にびっくりしたのは俺、彼女、殺したのかと思ったよ、ほんとに⁸⁾。)

K: アノー、ソレ、イツモ アンナ。ヤッパリ ジブンワサ、アノー ナンテユーノ？ Consiente ノトキワサ、(J: ウン) パットサ、カンガエンノワサ、ナニカ アッタッテ ユーノ アタマ キテ。ナニト ブツカッタトカサ、ナニガ アッタ、ソレ アタマニ スグニ クルンダヨ。

(あの一、それ、いつもあるな。やっぱり自分はさ、あの一何て言うの？ (ス) 意識があるときはさ、(J: うん) パッとさ、考えるのはさ、何かあったっていうのが頭に浮かんで。何とぶつかったとかさ、何があった、それが頭にすぐに浮かぶんだよ。)

J: ウン、ソー。

(うん、そう。)

K: ダカラ、「ア、イキテルナ」ト オモッタラ 「ア」ト オモッテ ヨコ ミタラサ、トナリニ carretón ガ アルカラ (J: ウン)、デ、シッテル オジサンダカラサ、「ダイジョーブカ？」ッたら、「ア、ダイジョーブダヨ」ッテ。「ホント ダイジョーブカ」「ダイジョーブダヨ。タダ アノ、ムスメガ オチタ、ン、ダケダヨ」ッテ イッテカラ。

(だから、「あ、生きてるな」と思ったら「あ」と思って横見たらさ、隣に (ス) 荷台車

があるから (J: うん)、で、知ってるおじさんだからさ、「大丈夫か？」って言ったら、「あ、大丈夫だよ」って。「ほんとに大丈夫か」「大丈夫だよ。ただあの、娘が落ちただけだよ」って言うて。）

J: ウン。

(うん。)

2) 沖縄方言中心の会話 (工藤編 2012 : 82~83)

[話者情報]

G: オキナワ第一移住地在住。2世。1957年生まれ (収録当時 47歳)。男性。オキナワ第一移住地生まれ。二重国籍。収録当時の職業は農業・組合職員。

H: 1) の談話①のHと同一人物。

G: ウージー、アレ シッパイソーネン スッサー、クレー。

(サトウキビ、あれは失敗しているような気がするなあ、これは。)

H: ダテーン イータン?

(たくさん植えたの?)

G: サンジッチョー。

(30町【歩】。)

H: サンジッチョーブ。ナー シューカク ナイシヤン?

(30町歩。もう収穫できるもの?)

G: ライネン。

(来年。)

H: ライネン。ダイジョーブヤサニ。ウィフィグワーヤイネー。ダテーン イーレーカラ、{Gの笑い} コージョーカイ イジャス、イジャスンチ。

(来年。大丈夫でしょう。少ない量なら。たくさん植えたら、{Gの笑い} 工場に出すって。)

G: ヤガティ ゴジュー イリータン。(H: ウーン) ゴジュー イールカ ケーカクソータルバーテー。(H: アー) ***タンナ、ウトウルサン。

(もう少しで 50【町歩】入れる【投資するの意】ところだった。(H: うーん) 50 植えるか計画していたんだよね。(H: あー) *****、恐ろしい。)

H: ドゥーナ、ドゥーナ キカイシ?

(自分の、自分の機械で?)

G: カティ。

(借りて。)

H: カティ?

(借りて?)

G: ウン。

(うん。)

H: アー。カティーネー、ウユバーリッサヤ、ウン。トクニ ナマ コージョーガ ムル
ウージーサ、ウージ チクヤーガ マンディ、イッパイ ソークトゥ、ナマ。

(あー。借りてなら、何とかなるだろうね、うん。特に今工場がみんなサトウキビをさ、
サトウキビ作りをする人が多くてね、いっぱいしているから、今。)

G: イッパイ ソークトゥ、(H: ウン) コーヤーン ウラン。デージ ナトーサ。

(いっぱいしているから、(H: うん) 買う人もいない。【売るのが】大変になっている。)

H: コンド イータン?

(今度植えたの?)

G: ウン、コンド。

(うん、今度。)

H: コンド。ナー ミートーン、アンセー?

(今度。もう芽は出ている、それじゃあ?)

G: ミーティチャン。

(生えてきた。)

H: ミーティチャン。クサヤ ダイジョーブ**?

(生えてきた。草は大丈夫**?)

G: Carpir シミタン。

((ス) カルピル 【農薬の名前】を【散布】させた。)

H: Carpir シミ… {笑い}

((ス) カルピル 【農薬の名前】 【散布】させ… {笑い})

G: クスイ マチュガヤーンディチ ウムトータシガ、ナー。

(薬【農薬】を撒こうかなーって思っていたけど、もう。)

H: アメ フッタラ マシヨ。

(雨が降ったらまし【になる】よ。)

以上の談話からもわかるように、ボリビアの場合、40代の2世では、日本語、沖縄方言ともに保持されており⁹⁾、20代の2世では、日本語が保持されている¹⁰⁾。一方、ブラジルの場合、次に示す20代の2世の談話に見られるように、日本語運用能力が低くなる。下記の談話は、工藤ほか(2009)から2世であるHの談話を抜粋したものである¹¹⁾。話者Iは1世であることに注意されたい。これは、ブラジルではモノリンガル化が進み、2世同士の日本語による談話録音が難しかったことによるものである(ボリビアの談話と同様に、発話の日本語部分はカタカナで、現地語による部分はアルファベットで記し、括弧内に標準語訳を示す¹²⁾)。

[話者情報]

H: サンパウロ市ビラカロン地区在住。2世。1979年生まれ(収録当時27歳)。男性。サンパウロ市出身。ブラジル国籍。収録当時、化粧品販売業に従事。Iの親戚の息子。

I: サンパウロ市ビラカロン地区在住。1世。1953年生まれ(収録当時52歳)。男性。沖縄県島尻郡小禄村出身。日本国籍。1961年、7歳の時にブラジルに移住。収録当時、建設資材販売業に従事。Hの親戚。

I: [息を吸う] キョーワ [タバコを吐く] ン? サムイネ。Já tá frio, né? Hoje.

([息を吸う] 今日は [タバコを吐く] ん? 寒いね。 (ポ) もう寒いね、今日は。)

H: キョー。ハイ。(I: ン?) ホント サムイ、キョー。

(今日。はい。(I: ん?) ほんとに寒い、今日は。)

I: De manhã táva um pouquinho mais quente, que chega loja fica um pouco mais frio, né?

((ポ) 朝は少し暖かったけど、店に着いたら少し寒くなったね。)

H: ンー。

(うん。)

I: [お茶を飲む] ンー。アンシー、{Hの咳払い} アー、ニチヨー、ドイ、ド、ドヨー ドヨー ニチヨー、ドコエ デテル? ンー、アソビニ ドコニ イクノ? アンタワ?

([お茶を飲む] うん。それで、{Hの咳払い} あー、日曜、土曜、土曜、日曜はどこに出ているんだ? んー? 遊びにどこに行くの? 君は?)

H: アソビ?

(遊び?)

I: エー。

(うん。)

H: アソビワー… (I: エ?) ナナニウ? (I: ト…、ン?) ア、カラオケニ イク。

(遊びは… (I: え?) 【日本語で】何と言う? (I: と…、ん?) あっ、カラオケに行く。)

I: ンー、トモダチト?

(んー、友だちと?)

H: ハイ。

(はい。)

I: イッショニ? モー、モー *namorar* モ シテル?

(一緒に? もう (ポ) 恋愛もしてる?)

H: アー、マダー、(I: エ? エ?) ナニユー。{笑い}

(あー、まだ、何だよ。{笑い})

I: コイビトー、マダ サガシテナイ?

(恋人はまだ探してない?)

H: マダー、ア、マダ サガシテル。

(あ、まだ、探している。)

白岩ほか(2011)では、両コミュニティにおける、このような違いの背景には、生活戦術の違いがあると述べた。つまり、子ども世代である2世に対して、ブラジルでは「ブラジル国籍を取得させ、ブラジルの公教育を重視し、高学歴化に基づくブラジル人としての社会的成功をめざす」という生活戦術をとり、ボリビアでは「日本国籍を取得させ、ボリビア人と隔離した日ボ校において排他的二元的教育をおこない、二重国籍という生活戦術による経済的成功(ボリビア人を雇用した大規模農業と日本への長期研修)をめざす」という生活戦術をとるという違いがあり¹³⁾、これが日本語の使用実態にも反映されているのではないかと考えたのである。

ただし、より直接的には、日本語学習歴における違いが相関していると思われる。3節と4節で、言語生活調査の概要と両コミュニティにおける言語使用意識と言語能力意識について述べたあと、5節で、白岩ほか(2011)では分析できていなかった日本語学習歴の違いについて補足をする。

3. 言語生活調査についての概要

本稿が分析の対象としているのは、白岩ほか（2011）と同様に、ブラジルとボリビアの沖縄系エスニックコミュニティで実施した言語生活調査で得られたデータである。以下、1) 調査地、2) 言語生活調査の概要、3) 分析項目、4) 分析対象者に分け、その概略を簡単に示しておくことにする。詳細は白岩ほか（2011）を参照されたい。

1) 調査地は、下記のブラジルとボリビアの沖縄系コミュニティである。

- ① ブラジル サンパウロ市 ビラカロン地区
- ② ボリビア オキナワ第一移住地

2) 言語生活調査の概要は表1のとおりである。

【表1 言語生活調査の概要】

調査地点名	ビラカロン（ブラジル）	オキナワ第一移住地（ボリビア）
調査実施期間 ¹⁴⁾	2005年5月～9月	2007年7月、8月
調査対象者	調査地在住の旧小祿村出身者およびその子弟（ウルクンチュ）	オキナワ日本ボリビア協会の会員で第一移住地に籍を持つ288名 ¹⁵⁾
無作為抽出の基礎データ	小祿・田原郷友会名簿に登録された150名	第一移住地の会員名簿に登録された123名
調査方法	調査票を用いた面接調査	
調査員	調査地在住の青年ウルクンチュ	オキナワ日本ボリビア協会・調査地在住の女性7名
調査票回収人数（総計）	87人	107名

3) 分析項目

言語生活調査票は、次の項目で構成されている。どちらのコミュニティにおいてもほぼ同一のものを使用している。本稿では、このうち、「2. 個人的属性2：言語生活史（1世用／2世、3世用）」の日本語学習歴に関する項目と、「7. 日本語・方言教育意識」の項目を中心に分析を行う。

【表2 言語生活調査の項目】

	項目名		項目名
1	個人的属性1：社会的属性（全世代共通）	6	日本語能力・方言能力・現地語（ポルトガル語、スペイン語）能力意識
2	個人的属性2：言語生活史（1世用／2世以下用）	7	日本語・方言教育意識
3	家庭での言語使用	8	訪日経験（デカセギ経験）と言語意識
4	メディア・娯楽と言語使用	9	コロニア語・方言をめぐる意識
5	職場・地域社会での言語使用		

4) 分析対象者

本稿の分析対象者は、白岩ほか（2011）での分析対象者と同じである。なるべく各世代を代表する対象者を中心に分析を行うため、両コミュニティとも、暫定的に、一つの世代を30年の範囲に収まるものに限定した。世代の区別は日本政府算定方式に従い、両親の世代が異なる場合、子供の世代は若い方の世代の親と等しいものとしている。また、1世は言語形成期を考慮し、暫定的な基準として、渡航時に13歳以上であった対象者は「成人移民」、12歳以下であった対象者を「子ども移民」として分類している（以下、本稿では、それぞれ、「1世成人」、「1世子ども」と表記する）。分析対象者の世代別分布を表にすると次の表3ようになる。

【表3 分析対象者の世代別分布】

	ビラカロン（ブラジル）	オキナワ第一移住地（ポリビア）
1世成人	9	21
1世子ども	10	12
2世	36	52
3世	13	8
合計	68	93

4. 言語使用意識と言語能力意識の違い

本節では、本稿の前提となる、白岩ほか（2011）での分析結果を示す。両コミュニティの言語使用実態において大きな違いが見られる2世を中心に、言語使用意識と言語能力意識の違いをまとめると、次のようになる。

1) 言語使用についての意識

ブラジルのビラカロン地区の場合、2世では、家庭内の場合か、日系団体及び友人の場合かを問わず、使用言語は主に現地語（ポルトガル語）であるという回答が上位を占める。親に対する使用言語も現地語が中心になっている。

一方、ポリビアのオキナワ第一移住地の場合、2世は、家庭内の場合・日系団体及び友人の場合ともに、使用言語は日本語と現地語（スペイン語）半々であるという回答が多く、日本語使用が保持されている。親に対する使用言語も、主に日本語である。

2) 言語能力についての意識

ブラジルのビラカロン地区では、2世になると、日本語の4技能（聞ける・話せる・読

める・書ける)への自己評価は低くなる。「読める」と「書ける」では、「まったくできない」と回答する人が多く、「聞ける」と「話せる」についても、日常会話、家庭での話、あいさつといった日常生活に関わる場面をのぞいては、自己評価は低い。沖縄方言の場合は、「聞ける」については、「だいたいできる」、「少しできる」に回答が集中しているが、「話せる」になると、場面に関わらず、「少しできる」、「まったくできない」に回答が集中し、自己評価は全体的に低くなる。

一方、ボリビアのオキナワ第一移住地では、2世の日本語に対する自己評価は高い。「聞ける」と「話せる」についてはほとんどの場面で「よくできる」「だいたいできる」に回答が集中している。これは3世になっても変わらない。沖縄方言の場合、「聞ける」についての2世の自己評価は高く、「よくできる」、「だいたいできる」に回答が集中している。あいさつや家庭での話など、日常的な場面においては「話せる」と回答する人もブラジルに比べると多く見られる。

5. 日本語学習歴に見られる違い

本節では、2世を中心に、日本語能力の保持に直接関与していると考えられる日本語学習歴について述べる。(1世成人については基本的に現地での教育歴が無いため、1世子ども以降を示す。)

まず、日本語学校の通学経験の有無についての回答をまとめると、次の表4のようになる¹⁶⁾。

【表4 日本語学校の通学経験の有無】

	ビラカロン (ブラジル)			オキナワ第一移住地 (ボリビア)		
	1世子ども	2世	3世	1世子ども	2世	3世
はい	2 (20.0%)	25 (69.4%)	6 (46.2%)	12 (100%)	48 (92.3%)	6 (75.0%)
いいえ	7 (70.0%)	3 (8.3%)	4 (30.8%)	0 (0%)	3 (5.8%)	0 (0%)
未回答	1 (10.0%)	8 (22.3%)	3 (23.0%)	0 (0%)	1 (1.9%)	2 (25.5%)
合計	10 (100%)	36 (100%)	13 (100%)	12 (100%)	52 (100%)	8 (100%)

2世を見ると、ブラジルでは約69%、ボリビアでは約92%の人が通学経験を持っている。大きく違ってくるのは、通学期間である。次の表5は、通学期間についての回答をまとめ

たものである。

【表5 日本語学校への通学期間¹⁷⁾】

	ビラカロン (ブラジル)			オキナワ第一移住地 (ボリビア)		
	1世子ども	2世	3世	1世子ども	2世	3世
2年未満	1 (10.0%)	6 (16.7%)	1 (7.7%)	0 (0%)	1 (1.9%)	0 (0%)
2年以上4年未満	1 (10.0%)	13 (36.1%)	2 (15.4%)	2 (16.7%)	2 (3.8%)	1 (12.5%)
4年以上6年未満	0 (0%)	4 (11.1%)	1 (7.7%)	2 (16.7%)	2 (3.8%)	0 (0%)
6年以上	0 (0%)	1 (2.8%)	1 (7.7%)	8 (66.6%)	41 (78.8%)	5 (62.5%)
その他 ¹⁸⁾	8 (80.0%)	12 (33.3%)	8 (61.5%)	0 (0%)	6 (11.7%)	2 (25.0%)
合計	10 (100%)	36 (100%)	13 (100%)	12 (100%)	52 (100%)	8 (100%)

2世の回答を中心に見ると、ブラジルの場合、2年以上4年未満の通学期間の人約36%でもっとも多いが、2年未満の人約17%いる。一方、ボリビアでは、約79%の人が6年以上であり、3世でも約63%の人が6年以上の通学期間を有している。

さらに、日本語学校への通学頻度にも違いが見られる。次の表6は、「日本語学校に週に何回通ったか」への回答をまとめたものである。

【表6 日本語学校への通学回数 (週単位)】

	ビラカロン (ブラジル)			オキナワ第一移住地 (ボリビア)		
	1世子ども	2世	3世	1世子ども	2世	3世
1回~2回	0 (0%)	4 (11.1%)	4 (30.8%)	1 (8.3%)	12 (23.1%)	0 (0%)
3回~4回	0 (0%)	9 (25.0%)	1 (7.7%)	0 (0%)	2 (3.8%)	0 (0%)
5回以上	2 (20%)	10 (27.8%)	1 (7.7%)	11 (91.7%)	31 (59.6%)	6 (75.5%)
その他 ¹⁹⁾	8 (80%)	13 (36.1%)	7 (53.8%)	0 (0%)	7 (13.5%)	2 (25.0%)
合計	10 (100%)	36 (100%)	13 (100%)	12 (100%)	52 (100%)	8 (100%)

ボリビアの2世では、週5回以上と回答する人が約60%いる一方、ブラジルでは、約28%である。(なお、ボリビアでは3世でも約76%の人が5回以上である。)

このように、ブラジルとボリビアにおける日本語の使用意識や能力意識、使用実態の違

いには、日本語学習歴の違いが影響していると考えられる。

では、2世においてポルトガル語へのモノリンガル化が進んでいるブラジルのピラカロン地区では、日本語や沖縄方言の継承に関してどのような意識を有しているのでしょうか。一方、3世でも日本語が保持されているポリビアのオキナワ移住地での継承意識はどのようなものでしょうか。以下では、この点に関する分析を行う。

6. 日本語と沖縄方言の継承に関する意識

本節では、「日本語を学習したい（すべき）か」と「その理由」、「沖縄方言を学習したい（すべき）か」と「その理由」についての回答結果を、2世を中心に分析する。

6.1. 日本語学習に関する意識

1) 自己に関する意識

次の表は、「これから自分自身が日本語を習いたいか」という質問への回答結果である。2世では、ブラジルの方が「日本語を学習したい」と思っている人の割合が高い（約72%）。3世については、調査人数が少ないものの、どちらのコミュニティでも「学習したい」と思っている人が多く、若い世代になるにつれて、「日本語を学習したい」と思う割合が高くなっている。

【表7 これから日本語を習いたいか】

	ピラカロン（ブラジル）			オキナワ第一移住地（ポリビア）		
	1世 子ども	2世	3世	1世 子ども	2世	3世
はい	4 (40.0%)	26 (72.2%)	10 (76.9%)	6 (50.0%)	26 (50.0%)	7 (87.5%)
いいえ	6 (60.0%)	10 (27.8%)	3 (23.1%)	6 (50.0%)	24 (46.2%)	1 (12.5%)
その他	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (3.8%)	0 (0%)
合計	10 (100%)	36 (100%)	13 (100%)	12 (100%)	52 (100%)	8 (100%)

日本語を習いたいと思う理由は次の通りである。どちらにおいても、「日系人として祖先の言葉を受け継ぐため」がトップを占めており、日系人としてのアイデンティティに重きをおいていることがわかる。

【表 8 日本語を習いたい理由²⁰⁾】

	ビラカロン（ブラジル）			オキナワ第一移住地（ポリビア）		
	1世 子ども	2世	3世	1世 子ども	2世	3世
日系人として祖先の 言葉を受け継ぐため	4 (66.6%)	20 (42.6%)	8 (49.9%)	3 (30.0%)	15 (29.4%)	3 (21.4%)
文化に興味があるから	1 (16.7%)	12 (25.5%)	5 (31.3%)	2 (20.0%)	8 (15.7%)	4 (28.6%)
世界や日本の現状を 知りたいから	1 (16.7%)	7 (14.9%)	2 (12.5%)	2 (20.0%)	14 (27.5%)	2 (14.3%)
工作上必要あるいは 有利であるため	0 (0%)	2 (4.3%)	1 (6.3%)	0 (0%)	10 (19.6%)	4 (28.6%)
その他 ²¹⁾	0 (0%)	6 (12.7%)	0 (0%)	3 (30.0%)	4 (7.8%)	1 (7.1%)

違いが見られるのは、ポリビアでは、仕事に関係する回答が相対的に多いことである。これは、ポリビアの場合、日本へのデカセギの経験を持っている人が多く²²⁾、仕事のために日本語学習が必要であることに起因していると考えられる。ポリビアの2世と3世の「その他」の回答の中には、「(農業等の) 専門用語が習いたい」という回答が見られた。

また、1世を含めた自由回答の中には、ポリビアの場合、「書く事ができるようになりたい」「読み書きが習いたい」(1世成人)、「漢字を覚えたい」(2世)といったような、読み書きに関するものが含まれている。日本語能力の自己評価が高いポリビアでも、聞いたり話したりする能力に比べて、日常的な場面をのぞいては読んだり書いたりする能力への自己評価は低い。このことから、同じく日本語学習を希望するとの回答であっても、ブラジルとポリビアでは、学習目標が異なっていることが考えられる。

2) 子弟に関する意識

「子供・孫に日本語を習わせたいか」という問いへの回答は、次の表9のようになる。

【表9 子供・孫に日本語を習わせたいか】

	ビラカロン（ブラジル）				オキナワ第一移住地（ポリビア）			
	1世 成人	1世 子ども	2世	3世	1世 成人	1世 子ども	2世	3世
ぜひ習わせたい	8 (88.9%)	7 (70.0%)	24 (66.7%)	7 (53.8%)	16 (76.2%)	12 (100%)	32 (61.5%)	6 (75.0%)
本人の希望次第	1 (11.1%)	3 (30.0%)	11 (30.6%)	5 (38.5%)	5 (23.8%)	0 (0%)	16 (30.8%)	1 (12.5%)
習わせるつもりなし	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (7.7%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
その他	0 (0%)	0 (0%)	1 (2.7%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	4 (7.7%)	1 (12.5%)
合計	9 (100%)	10 (100%)	36 (100%)	13 (100%)	21 (100%)	12 (100%)	52 (100%)	8 (100%)

ブラジルでもポリビアでも「ぜひ習わせたい」と思っている人が多く、「習わせるつもりなし」はほぼ0%である。ポリビアの場合、2世では、自己に関しては学習を希望しないとの回答も約46%を占めていたが、子弟に関する意識となると、約62%が「ぜひ習わせたい」であり、約32%が「本人が希望するなら習わせたい」である。

その理由としては、次の表10に示すように、自己の場合と同様に、ブラジルでもポリビアでも「日系人として言葉を知っておくのは当然」「日本文化を理解するため」という日系人としてのアイデンティティに関係するものが上位を占めている。

【表10 子供・孫に日本語を習わせたい理由】

	ビラカロン（ブラジル）				オキナワ第一移住地（ポリビア）			
	1世 成人	1世 子ども	2世	3世	1世 成人	1世 子ども	2世	3世
日系人として言葉を知っておくのは当然	7 (53.8%)	8 (53.3%)	26 (39.3%)	7 (28.0%)	17 (32.7%)	10 (33.3%)	35 (38.9%)	3 (20.0%)
もっと日本文化を理解するため	4 (30.8%)	3 (20.0%)	24 (36.4%)	10 (40.0%)	15 (28.8%)	8 (26.7%)	23 (25.6%)	5 (33.3%)
世界や日本の現状を知れるから	2 (15.4%)	3 (20.0%)	11 (16.7%)	4 (16.0%)	9 (17.3%)	5 (16.7%)	20 (22.2%)	3 (20.0%)
工作上必要あるいは有利であるため	0 (0%)	1 (6.7%)	5 (7.6%)	4 (16.0%)	11 (21.2%)	5 (16.7%)	12 (13.3%)	3 (20.0%)
その他	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (6.6%)	0 (0%)	1 (6.7%)

日系の若い世代に対する意識においても、同様の結果が見られる。日系の若い世代が日

本語を学ぶのは必要かについての回答を見ると、表 11 に示すように、ブラジルでもボリビアでも「必要ない」と思っている人はほぼいない。2 世では両コミュニティともに「必要だ」と考えている人が半数以上いる（ブラジル 56%、ボリビア 64%）。

【表 11 日系の若い世代が日本語を学ぶのは必要か】

	ビラカロン（ブラジル）				オキナワ第一移住地（ボリビア）			
	1 世 成人	1 世 子ども	2 世	3 世	1 世 成人	1 世 子ども	2 世	3 世
必要	8 (88.9%)	8 (80.0%)	20 (55.6%)	8 (61.5%)	19 (90.5%)	10 (83.3%)	33 (63.5%)	4 (50.0%)
本人の 希望次第	1 (11.1%)	2 (20.0%)	15 (41.7%)	5 (38.5%)	2 (9.5%)	2 (16.7%)	14 (26.9%)	3 (37.5%)
必要ない	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (12.5%)
その他	0 (0%)	0 (0%)	1 (2.7%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	5 (9.6%)	0 (0%)
合計	9 (100%)	10 (100%)	36 (100%)	13 (100%)	21 (100%)	12 (100%)	52 (100%)	8 (100%)

「日系人なら日本語を話せるのは当然だという意見に賛成か」という質問についても、ブラジル、ボリビアともに、2 世において「賛成」という意見が半数以上を占めている（ブラジル 56%、ボリビア 58%）。

【表 12 日系人なら日本語が話せるのは当然だと言う意見に賛成か】

	ビラカロン（ブラジル）				オキナワ第一移住地（ボリビア）			
	1 世 成人	1 世 子ども	2 世	3 世	1 世 成人	1 世 子ども	2 世	3 世
賛成する	8 (88.9%)	9 (90.0%)	20 (55.6%)	8 (61.5%)	13 (61.9%)	9 (75.0%)	30 (57.7%)	5 (62.5%)
賛成しない	1 (11.1%)	0 (0%)	6 (16.7%)	4 (30.8%)	2 (9.5%)	1 (8.3%)	7 (13.5%)	2 (25.0%)
その他	0 (0%)	1 (10.0%)	10 (27.7%)	1 (7.7%)	6 (28.6%)	2 (16.7%)	15 (28.8%)	1 (12.5%)
合計	9 (100%)	10 (100%)	36 (100%)	13 (100%)	21 (100%)	12 (100%)	52 (100%)	8 (100%)

その理由としては²³⁾、ブラジルでもボリビアでも、世代を問わず、次のような、日系人としてのアイデンティティに関わる回答が多く見られる。自由回答に見られる代表的な意見を紹介する。（現地語で回答されているものについては日本語に訳して掲載する。）

ブラジル・ピラカロン地区

- ・日本人だから日本語がわかるのが自然（1世成人）
- ・文化を守るため（1世子ども）
- ・自分の源だから（2世）
- ・伝統や文化を守るため（3世）

ボリビア・オキナワ第一移住地

- ・日本人だから（1世成人）
- ・日本人だから日本人の顔をしていて日本語が話せないのは…（1世子ども）
- ・文化を維持するため（2世）
- ・日本人の血をひいているのでわかっていた方がよい（3世）

なお、ポルトガル語へのモノリンガル化が進んでいるブラジルでは、次のような、年長者とのコミュニケーションのためといった回答も見られた。このような回答は、日本語が保持されているボリビアではほとんど見られない²⁴⁾。

- ・親戚とコミュニケーションを取れるようにするため（1世成人）
- ・うまくなればもっとよく年上の人と話ができるようになる（1世子ども）
- ・年長者とコミュニケーションをとるため（2世）
- ・親戚の間では日本語をよく聞くから（3世）

以上のことから、ポルトガル語へのモノリンガル化が急速に進んでいるブラジルでも、日本語の継承意識は強いことがわかる²⁵⁾。この点については、戦後に開校された日本語学校に関する次の指摘が重要である。森幸一（2009）「言語」をめぐる移民史」（工藤ほか2009に所収）より引用する。

第四の特徴は、戦前のような全日制が採られることはなく、日本語学習は時間数が多い場合で1日2時間、週3回というものであり、しかも通学年数も戦前に比較すると格段に短くなっているという点、また、少ない通学年数・授業時間に加えて、戦前期と同様に日本語以外の図画、工作、音楽、唱歌などの授業が行われたり、学芸会や運動会などの学校行事も盛んに行われていたという点である。このことは、戦前と同

様に戦後においても、日本語教育の場は純粋な語学学校というよりも「日本人教育」の場という様相を呈していた。(森 2009 : 90~91)

ブラジルでは、ブラジルの公教育が重視されつつも、子弟教育におけるポルトガル語と日本語の扱いをめぐる、さまざまなモデルが提唱されてきた。戦後、最も広く受容されていたのは、「日本語習得を通じて、日本人移民一世のもつ技術・文化・価値などを継承し、これらを通じてブラジル社会に貢献する「立派なブラジル国民」を養成するという〈文化継承〉手段としての日本語教育の立場」(森 2009 : 91) である。

ボリビアでは、午前はスペイン語によるボリビア教育省のカリキュラムに沿った義務教育を行い、午後は日本語教育及び日本語による情操教育という、二言語二文化教育体制をとっているが、これは「日本の文化や価値観を備え、ボリビアという国家の発展に貢献できる立派なボリビア人」(森 2012 : 29) というモデルに基づいた子弟教育体制の確立が目指されているためである。

このように、どちらのコミュニティにおいても、日本語教育は、「語学教育」というよりも、日本文化や価値観の継承を重視した「日本人教育」としての性格が強いという点で共通している。

6.2. 沖縄方言学習に関する意識

言語生活調査では、日本語だけでなく沖縄方言の継承意識に関する質問も行った。ここでは、この点について分析する。

1) 自己に関する意識

「これから沖縄方言を習いたいか」という問いに対する回答をまとめると、表 13 のようになる。2 世では、ボリビアに比べて、ブラジルの場合の方が、習いたいと思っている人が多い(ブラジル約 72%、ボリビア約 46%)。このブラジルにおける 72%という数値は、表 7 の「これから日本語を習いたい」という回答の数値と同じである。ポルトガル語へのモノリンガル化が進んでいるブラジルのピラカロン地区では、日本語だけでなく沖縄方言に対する学習意欲も強いことがわかる。(なお、ボリビアの 2 世では、「習いたくない」という回答数の方が多い。)

【表 13 これから沖縄方言を習いたいか】

	ビラカロン（ブラジル）			オキナワ第一移住地（ポリビア）		
	1世子ども	2世	3世	1世子ども	2世	3世
はい	5 (50.0%)	26 (72.2%)	8 (61.5%)	5 (41.7%)	24 (46.2%)	6 (75.0%)
いいえ	5 (50.0%)	10 (27.8%)	5 (38.5%)	7 (58.3%)	26 (50.0%)	2 (25.0%)
その他	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (3.8%)	0 (0%)
合計	10 (100%)	36 (100%)	13 (100%)	12 (100%)	52 (100%)	8 (100%)

沖縄方言を習いたい理由については、次の表 14 に見られるように、どちらのコミュニティにおいても、「祖先の言葉を受け継ぐため」「沖縄方言を残したい」という沖縄系日系人としてのアイデンティティに関わるものがトップを占め、続いて「沖縄文化への興味」となる。日本語学習の場合とは違って、仕事関連の理由はほとんどなく、「親戚や地域との付き合い」という理由が挙げられている。

【表 14 これから沖縄方言を習いたい理由】

	ビラカロン（ブラジル）			オキナワ第一移住地（ポリビア）		
	1世子ども	2世	3世	1世子ども	2世	3世
祖先の言葉を受け継ぐため／ 方言を残したいから	5 (71.4%)	32 (52.4%)	6 (33.3%)	6 (75.0%)	31 (60.7%)	7 (50.1%)
沖縄の現状を知りたいから／ 沖縄の文化に興味があるから	1 (14.3%)	22 (36.1%)	6 (33.3%)	1 (12.5%)	11 (21.6%)	2 (14.3%)
親戚や地域の 付き合いに必要なから	1 (14.3%)	7 (11.5%)	5 (27.8%)	0 (0%)	7 (13.7%)	3 (21.4%)
家業に必要なから	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (2.0%)	1 (7.1%)
その他	0 (0%)	0 (0%)	1 (5.6%)	1 (12.5%)	1 (2.0%)	1 (7.1%)

2) 子弟に関する意識

子弟に関する意識では、両コミュニティともに、日本語学習についての意識と比べ、「本人の希望次第」という回答が多くなる。

【表 15 子供・孫に沖縄方言を習わせたいか】

	ビラカロン（ブラジル）				オキナワ第一移住地（ポリビア）			
	1世 成人	1世 子ども	2世	3世	1世 成人	1世 子ども	2世	3世
ぜひ 習わせたい	6 (66.7%)	4 (40.0%)	12 (33.3%)	4 (30.8%)	6 (28.6%)	6 (50.0%)	9 (17.3%)	1 (12.5%)
本人の 希望次第	2 (22.2%)	5 (50.0%)	16 (44.4%)	6 (46.2%)	12 (57.1%)	5 (41.7%)	37 (71.2%)	4 (50.0%)
習わせる つもりなし	1 (11.1%)	0 (0%)	3 (8.3%)	2 (15.4%)	2 (9.5%)	1 (8.3%)	2 (3.8%)	1 (12.5%)
その他	0 (0%)	1 (10.0%)	5 (14.0%)	1 (7.6%)	1 (4.8%)	0 (0%)	4 (7.7%)	2 (25.0%)
合計	9 (100%)	10 (100%)	36 (100%)	13 (100%)	21 (100%)	12 (100%)	52 (100%)	8 (100%)

表9と表15の2世の肯定的な回答をまとめると、次の表16のようになる。上でも述べたように、沖縄方言学習については、「本人の希望次第」という回答が多くなるが、ブラジルの方が、ポリビアよりも「ぜひ習わせたい」という回答が多いことは（ブラジル 33%、ポリビア 17%）、自己に関する意識と共通している。

【表 16 子供・孫に日本語／沖縄方言を習わせたいか】

	ビラカロン（ブラジル）		オキナワ第一移住地（ポリビア）	
	日本語	沖縄方言	日本語	沖縄方言
ぜひ習わせたい	67%	33%	62%	17%
本人の希望次第	31%	44%	31%	71%

その理由についても、自己に関する意識の場合と同様に、沖縄系日系人であるというアイデンティティに関わる理由が上位を占めている。

【表 17 子供・孫に沖縄方言を習わせたい理由】

	ビラカロン（ブラジル）				オキナワ第一移住地（ポリビア）			
	1世 成人	1世 子ども	2世	3世	1世 成人	1世 子ども	2世	3世
祖先の言葉を受け継ぐため／方言を残したいから	7 (70.0%)	6 (60.0%)	27 (54.0%)	8 (42.1%)	24 (61.5%)	15 (49.9%)	43 (63.2%)	7 (63.6%)
沖縄の現状を知りたいから／沖縄文化に興味があるから	3 (30.0%)	2 (20.0%)	19 (38.0%)	7 (36.8%)	9 (23.1%)	9 (30.0%)	17 (25.0%)	2 (18.2%)
親戚や地域の付き合いに必要なだから	0 (0%)	2 (20.0%)	4 (8.0%)	4 (21.1%)	5 (12.8%)	2 (6.7%)	4 (5.9%)	1 (9.1%)
家業に必要なだから	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (2.6%)	2 (6.7%)	3 (4.4%)	1 (9.1%)
その他	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (6.7%)	1 (1.5%)	0 (0%)

ウチナーンチュの若い世代に対する意識でも、2世を見ると、両コミュニティともに「本人の希望次第」が多い。

【表 18 ウチナーンチュの若い世代が沖縄方言を学ぶのは必要か】

	ビラカロン（ブラジル）				オキナワ第一移住地（ポリビア）			
	1世 成人	1世 子ども	2世	3世	1世 成人	1世 子ども	2世	3世
必要	4 (44.5%)	6 (60.0%)	9 (25.0%)	2 (15.4%)	10 (47.6%)	5 (41.7%)	10 (19.2%)	1 (12.5%)
本人の希望次第	3 (33.3%)	4 (40.0%)	23 (63.9%)	10 (76.9%)	9 (42.9%)	6 (50.0%)	35 (67.3%)	6 (75.0%)
必要ない	2 (22.2%)	0 (0%)	4 (11.1%)	1 (7.7%)	2 (9.5%)	1 (8.3%)	3 (5.8%)	1 (12.5%)
その他	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	4 (7.7%)	0 (0%)
合計	9 (100%)	10 (100%)	36 (100%)	13 (100%)	21 (100%)	12 (100%)	52 (100%)	8 (100%)

「ウチナーンチュなら沖縄方言を話せて当然だという意見に賛成か」という質問では、ブラジルでは、「賛成する」という意見が「賛成しない」を上回る（2世では、「賛成する」が45%、「賛成しない」が33%）。

【表 19 ウチナーンチュなら沖縄方言を話せるのは当然だという意見に賛成か】

	ビラカロン（ブラジル）				オキナワ第一移住地（ボリビア）			
	1世成人	1世子ども	2世	3世	1世成人	1世子ども	2世	3世
賛成する	7 (77.8%)	7 (70.0%)	16 (44.5%)	5 (38.5%)	6 (28.6%)	4 (33.3%)	10 (19.2%)	2 (25.0%)
賛成しない	2 (22.2%)	0 (0%)	12 (33.3%)	5 (38.5%)	9 (42.8%)	6 (50.0%)	22 (42.3%)	5 (62.5%)
その他	0 (0%)	3 (30.0%)	8 (22.2%)	3 (23.0%)	6 (28.6%)	2 (16.7%)	20 (38.5%)	1 (12.5%)
合計	9 (100%)	10 (100%)	36 (100%)	13 (100%)	21 (100%)	12 (100%)	52 (100%)	8 (100%)

表 12 の「日系人なら日本語が話せるのは当然だという意見に賛成か」への回答と比較すると次のようになる。ブラジルの場合、沖縄方言に関しても、「賛成する」が「賛成しない」より多いが、ボリビアの場合、沖縄方言については、「賛成しない」という回答が多くなる。ブラジルとボリビアでは沖縄方言の継承意識の違いが見られる。

【表 20 日本語／沖縄方言を話せるのは当然だという意見に賛成か】

	ビラカロン（ブラジル）		オキナワ第一移住地（ボリビア）	
	日本語	沖縄方言	日本語	沖縄方言
賛成する	56%	45%	58%	19%
賛成しない	17%	33%	14%	42%

どちらのコミュニティにおいても、賛成する理由として、表 17 に示したような、沖縄系日系人としてのアイデンティティや文化継承に関連する回答が多いが、ブラジルでは、次のような、年長者や親戚との付き合いに必要なとの回答が見られる。

- ・親戚とコミュニケーションをとるため（1世成人）
- ・付き合いをしていくのに大切（1世子ども）
- ・主に年配者とよくコミュニケーションできるため（2世）
- ・祖父母と、彼らの言葉で会話できるため（3世）

ボリビアでは、「年よりとのコミュニケーションがとれるから（1世成人）」、「おじいちゃん達と会話ができるようにしたいから（3世）」といった回答も見られるが、その一方で、賛成しない理由として、次のような、「日本語がわかれば十分だ」といった回答が見られる。（ブラジルの場合、同様の回答は、「日本語だけでいい（1世成人）」という回答が1名見

られたただけだった。)

- ・日本語がわかるから (1 世成人)
- ・日本語が出来れば十分 (2 世)
- ・話せなくてもこまらないから (2 世)

以上、全体として見ると、日本語の継承意識については、その理由を含めて、ブラジルとボリビアの間に大きな差は見られない。一方、沖縄方言に関しては、ブラジルの方が継承意識が強い。ボリビアに比べて、「ウチナーンチュなら沖縄方言が話せて当然だ」と思う人が多く、日本語だけでなく沖縄方言も「自分自身がこれから学習したい」「若い世代にも学習してもらいたい」と思っていることがわかる。

7. おわりに

言語能力の保持や継承意識には、様々な要因が絡んでいると思われるが、本稿では、主に、言語生活調査の結果から、その一端を紹介した。上で述べてきたことをまとめると次のようになる。

- 1) 言語生活調査の結果だけでなく、談話録音調査の結果からも、日本語や沖縄方言の保持において、両コミュニティの間に違いが確認できる。
- 2) ブラジルでは、2 世においてポルトガル語へのモノリンガル化が進み、ボリビアでは、日本語が保持されているが、これには、日本語学習歴の違いが関わっている。ボリビアの方が、学習期間が長く、1 週間の学習回数も多い。
- 3) 日本語の継承意識に関しては、両コミュニティともほぼ同じである。どちらにおいても、日系人としてのアイデンティティに関わる問題として日本語学習の必要性を感じている。
- 4) 沖縄方言の継承意識については、両コミュニティの間に違いが見られる。両コミュニティともに、沖縄系日系人としてのアイデンティティに関わる問題として沖縄方言を考えているのだが、ブラジルの方が、「ウチナーンチュなら沖縄方言が話せて当然だ」と思っていると同時に、「今後学習したい」「若い世代に学習してもらいたい」と考えている人が多い。

上の4)の点は、ブラジルのビラカロン地区において、ほぼ同時期に開設された2つの「ウチナーグチ教室」の活動につながっている。ブラジル沖縄県人会ビラカロン支部会館内に、1994年より「ビラカロンおきなわ学園」が開校され、現在「日本語教室」と「ウチナーグチ教室」が開講されている。ウチナーグチ教室は2009年からであるが、担当者(教師)は、小禄出身及び山原出身の4名である。このうちの一人であるU氏には、言語生活調査にもご協力をいただいた。U氏は、ごく幼い時にボリビアに渡り、6歳の時にブラジルに移動した。20歳くらいまで祖母と同居したことからウチナーグチができる方である。また、1990年に設立されたEXATUS学園にも「日本語教室」と「ウチナーグチ教室」が開設されている。ウチナーグチ教室は、2008年から続けられてきたが、現在は、三線教室のなかでウチナーグチの指導を実践しているとのことである。

ブラジルのビラカロンの場合、人種的には本土系日系人と同じであるが、文化的、歴史過程的には異質な存在であるというポジションから、「ブラジルのウチナーンチュ」というアイデンティティが80年代初頭から析出された。文化的差異の指標として、琉球芸能(踊り、民謡など)や沖縄料理などが選択され、その実践を通じて、このアイデンティティが表明され、強化されてきている。特に若者の間では、琉球國祭り太鼓、レキオス太鼓などが沖縄系空間を越えたイベントなどで実践されている。さらに、2003年から2世リーダーたちを中心に「沖縄祭り(Festival do Okinawa)」が開催され、その規模は拡大の一途を辿り、いまや沖縄系コミュニティ最大のイベントになっている。そこで実践される「文化」はすべてが沖縄起源のものというわけではなく、他の文化を起源とするものとの対照のなかで、沖縄文化の独自性、異質性が明白になり、このこともまた、「ブラジルのウチナーンチュ」という主体の構築に強く関わっていると考えられる。また、若者たちがインターネットを通じて、現在のOkinawan Musicと接触していることもこうした主体の生成に関与しているようである。こうした文脈の中で、沖縄方言の継承、方言教室というものも捉えられているのではないかと思われる。

一方、ボリビアのオキナワ移住地では、ビラカロンと比べると、沖縄性を顕在化させる「日本」が不在ないし脆弱なのではないかと考えられる。日常的に接触するのは、「日本」を越えたボリビア文化であり、ボリビア人である。ここでは、ボリビアと対比されるかたちで日本性が顕在化してきて、沖縄系人という意識が醸成されにくいのではないかと思われる。沖縄文化も「日本文化」の一部として位置づけられていることが、ブラジルの場合とは異なっている点である。このことから、沖縄性というのはあくまで「日本」との対照のなかで構築されるものなのではないかと考えられるのである。

ブラジルのピラカロン地区における「ブラジルのウチナーンチュ」という意識の高まりが、今後どのような展開を見せるか注目しておく必要がある。一方、3世でも日本語が保持されているボリビアのオキナワ移住地における日ボ校では、3年前から、生徒の日本語能力低下により、国語の教科書を使用した教育から、外国語教育としての日本語教育に切り替えられている。このことがどのような変容をもたらすのかも注目される点である。今後の課題としたい。

付記

本調査研究は、大阪大学 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」及び大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文科学国際研究拠点」における調査データに基づくものである。本調査にご協力いただいた移住地の方々に改めて御礼申し上げます。

注

- 1) 言語生活調査の詳細については3節を参照されたい。
- 2) 1世子ども移民の場合、ブラジルでは「準2世」として、ボリビアでは「準1世」として捉えられている。1世を「1世成人」と「1世子ども」に分ける基準については、3節の「4) 分析対象者」を参照されたい。
- 3) 談話と標準語訳における記号は、工藤編（2012）の表記をそのまま引用している。引用部分で用いられている記号の意味は以下のとおりである。
(ス)：スペイン語に該当する箇所
*：音声が聞き取り不能であった部分や意味が不明な部分
【】：文脈を理解する上で必要な情報
{ }：笑いや咳などの非言語音
- 4) 本談話では、農業というものは天気に関する心配が絶えないこと、これからは異常な天気の中でどのように農業を営んでいくかが課題であることが話されている。
- 5) 正しくは「共存共栄」。
- 6) 本談話では、Jが最近起こしたバイク事故と、Kが以前に起こした事故の体験が語られている。
- 7) 工藤編（2012）の談話資料に収録されている20代の2世話者は「ボリビア国籍」となっているが、ボリビアのオキナワ移住地の場合、2世以下は基本的に日本とボリビアの二重国籍である。

【国籍】

	オキナワ第一移住地（ポリビア）			
	1世 成人	1世 子ども	2世	3世
日本	21	12	2	1
ポリビア	0	0	3	0
二重国籍	0	0	45	6
その他	0	0	2*	1**
合計	21	12	52	8

*2名ともアルゼンチン国籍/**ブラジルを含む三重国籍

- 8) Jは事故のとき、オートバイの後ろに彼女を乗せていた。
- 9) ポリビアの沖縄系コミュニティでは、3世においても日本語が保持されている。次は、工藤編（2012）から3世同士の談話を抜粋したものである（本文中での引用と同様に、発話そのものはカタカナで示し、括弧内に標準語訳を示す）。2世の談話に比べると一文が短くなるが、3世同士でも日本語での談話が可能であることに注目されたい。

[3世同士の日本語での談話（工藤2012：119）]

M：{笑い} オマエ ドンナ オンガク キクノ？（{笑い} お前どんな音楽聞くの？）

L：イヤー、フツーノサ。（いやー、普通のさ。）

M：{笑い} フツッテ？（{笑い} 普通って？）

L：ポップトカノサ。（ポップとかのさ。）

M：アー。スペインゴ？ニホンゴ？（あー。スペイン語？日本語？）

L：ニホンゴ。スペインゴワ キカナイ。（日本語。スペイン語は聞かない。）

- 10) 談話録音時に、普段どおりに話すよう依頼している。2世の場合、日本語中心の会話の中にスペイン語が現われることがあるが、20代の2世同士になると、その頻度は高くなり、本稿で抜粋した談話においても、後半にいくと、ほとんどスペイン語だけで会話が進んでいる箇所が見られる。このように、同じ2世であっても、言語運用の多様性が見られるが、ポリビアでは2世であっても日本語が保持されているということが特徴的である。

- 11) 本談話のHは、1)の談話①と2)に出てくる話者Hとは異なる人物である。

- 12) 談話と標準語訳における記号は、工藤ほか（2009）の表記をそのまま引用したものである。引用部分で用いられている記号の意味は以下のとおりである。

(ポ)：ポルトガル語に該当する箇所

[]：沈黙や状況描写など、特記すべき事項がある場合

{ }：笑いや咳などの非言語音

- 13) ポリビアの沖縄系移民の場合、子弟の「同化」をめぐるのは、労働者である「現地人」への同化をそ

の文化的低さから、極力回避するという戦略がとられてきた。勿論、「ボリビア人」と範疇化される、階層的に日本人と対等ないしそれ以上のボリビア人への同化は、日本文化や日本語を維持した上で許容するというスタンスがとられてきた。「ボリビア人」と範疇化される人々は日ボ学校に通学する非日系ボリビア人やサンタクルスなどの都市部の中産階級に帰属するボリビア人である。オキナワ移住地内には、こうした「ボリビア人」がごく少数であることから、同化を回避するために、可能な限り日系人子弟と「現地人」との接触を避ける「分離」という戦略がとられてきた。このことは、端的には日ボ学校の創設やそこの二文化二言語教育体制に示されている。こうした同化をめぐる生活戦略もまた、オキナワ移住地における日本語の使用実態に反映しているのではないかと考えられる。

- 14) この期間以外にも、ブラジルのピラカロン地区では、2005年7月26日から28日まで、ボリビアのオキナワ第一移住地では、2007年8月23日から26日までの談話録音調査の際に補充及び追加調査を行っている。
- 15) 15歳未満の会員、移住地外へ転居した会員、日本で出稼ぎ・研修中の会員、日系人との婚姻により加入したボリビア人配偶者などは除外した数である。
- 16) 表中の百分率については、基本的に、小数点以下第二位で四捨五入したものである。また、四捨五入後、すべての項目を合算した数値が100%にならない場合（誤差は0.1から0.2）、「未回答」もしくは、「未回答」を含む「その他」の回答欄で調整し、「未回答」、「その他」で調整ができなかった場合、もっとも大きい数値で調整をした。これらの数値の扱い方は、以下のすべての表において同様である。
- 17) 言語生活調査票では自由記述式の回答であるが、年単位での集計に換算して記載している。
- 18) 「通学中」など、年数としての集計が難しい場合や、未回答の数値については「その他」として分類した。
- 19) 複数の教育機関に通学しており、それぞれの通学回数異なる場合など、集計が難しい回答や、未回答を含めた数値である。
- 20) 複数回答の場合、それぞれ1票として集計した。データの合計数が【表7】の「はい」の回答数と一致しないのはそのためである。表中の百分率は回答数の合計を母数に計算したものである。他の表についても同様である。
- 21) 選択肢の「その他」を選んだ回答の数と、選択肢からは選ばずに、自由記述として回答している回答の数を足したものである。【表10】【表14】【表17】についても同様である。
- 22) デカセギ経験の有無への回答を表にすると次のようになる。ボリビアの方が、2世において、デカセギの経験を持つ人が多い。

【デカセギ経験の有無】

	ビラカロン（ブラジル）				オキナワ第一移住地（ボリビア）			
	1世 成人	1世 子ども	2世	3世	1世 成人	1世 子ども	2世	3世
はい	3 (33.3%)	1 (10.0%)	3 (8.3%)	1 (7.7%)	3 (14.3%)	3 (25.0%)	23 (44.2%)	0 (0%)
いいえ	3 (33.3%)	3 (30.0%)	12 (33.3%)	5 (38.5%)	11 (52.4%)	3 (25.0%)	12 (23.1%)	3 (37.5%)
未回答	3 (33.4%)	6 (60.0%)	21 (58.4%)	7 (53.8%)	7 (33.3%)	6 (50.0%)	17 (32.7%)	5 (62.5%)
合計	9 (100%)	10 (100%)	36 (100%)	13 (100%)	21 (100%)	12 (100%)	52 (100%)	8 (100%)

23) 本項目については自由記述式の回答形態をとっているが、すべてのインフォーマントが回答しているわけではない。

24) ただし、ボリビアでも、二人の2世が、本回答と関連すると思われる「会話のため」といった回答をしている。

25) 日本語学習に関しては、ブラジルもボリビアも同じような意識を持っているのであるが、ブラジルの場合、2世ではすでにポルトガル語へのモノリンガル化が起こっているという現状がある。これには、第5節で述べた、日本語学習歴に見られる違いも影響していると思われるが、日本語の学習環境において、次のような問題点を指摘している。下記の表は、「地域日本語学習環境の問題点は何か」という回答をまとめたものである。（なお、「その他」として集計したものは、選択肢ではなく自由記述による回答の数である。）

【地域日本語学習環境の問題点】

	ビラカロン（ブラジル）				オキナワ第一移住地（ボリビア）			
	1世 成人	1世 子ども	2世	3世	1世 成人	1世 子ども	2世	3世
日本語を使う機会がない	3 (30.0%)	3 (25.0%)	22 (41.5%)	9 (45.0%)	2 (14.3%)	1 (10.0%)	6 (15.8%)	1 (12.5%)
親が熱心でない	1 (10.0%)	6 (50.0%)	9 (17.0%)	4 (20.0%)	2 (14.3%)	4 (40.0%)	9 (23.7%)	2 (25.0%)
現地での日本文化の影響が少ない	0 (0%)	0 (0%)	8 (15.1%)	0 (0%)	1 (7.1%)	0 (0%)	6 (15.8%)	2 (25.0%)
日本語が難しい	1 (10.0%)	1 (8.3%)	7 (13.2%)	5 (25.0%)	1 (7.1%)	0 (0%)	3 (7.9%)	2 (25.0%)
教師のレベルと学校の問題	1 (10.0%)	0 (0%)	3 (5.7%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (10.0%)	0 (0%)	0 (0%)
日本語を学習するメリットがない	2 (20.0%)	0 (0%)	1 (1.9%)	1 (5.0%)	1 (7.1%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
その他	2 (20.0%)	2 (16.7%)	3 (5.6%)	1 (5.0%)	7 (50.1%)	4 (40.0%)	14 (36.8%)	1 (12.5%)

ブラジルの2世の回答を見ると、日本語を使う機会がないことを理由に挙げている人が約42%いる。

意識面においては、日本語を保持する必要があると思っていながらも、実際の生活環境においては、

使う機会が少ない。

ボリビアの2世でも、「親が熱心でない」「使う機会がない」「日本文化の影響が少ない」といった回答があるが、自由記述の回答には、「問題なし」との回答も多く見られた（1世成人：4名、1世子ども：3名、2世：16名、3世：2名）。ブラジルの自由記述の回答に、このような回答は見られない。

参考文献

工藤真由美編（2012）『ボリビア沖縄系移民社会における談話資料』大阪大学大学院文学研究科日本語学講座工藤真由美研究室。

工藤真由美・森幸一・山東功・李吉鎔・中東靖恵（2009）『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』ひつじ書房。

白岩広行・森田耕平・齊藤美穂・朴秀娟・森幸一・工藤真由美（2011）「ブラジルとボリビアにおける沖縄系エスニックコミュニティと日本語」『阪大日本語研究』23。

森幸一（1998）「戦後における沖縄系移民のエスニック職業としてのクストゥーラ（縫製業）—ミドルマン・マイノリティへの道—」サンパウロ人文科学研究所編『人文研』No.1。サンパウロ人文科学研究所。
——（2000）「ブラジルにおける沖縄系人のアイデンティティの変遷過程」『沖縄国際大学総合産業研究所報告書』8-4。

——（2003）「ブラジルの琉球芸能と主体の構築—演芸会・コンクール・パレード—」西成彦・原毅彦編著『複数の沖縄—ディアスポラから希望へ—』人文書院。

——（2009）「「言語」をめぐる移民史」工藤真由美・森幸一・山東功・李吉鎔・中東靖恵著『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』ひつじ書房。

——（2011）「沖縄系都市エスニックコミュニティの成立と展開過程の経済的側面—自営業戦術の累積的連鎖を視点として—」『比較民俗研究』26。

——（2012）「オキナワ移住地における子弟教育の歴史と葛藤の諸相」工藤真由美編『ボリビア沖縄系移民社会における談話資料』大阪大学大学院文学研究科日本語学講座工藤真由美研究室。

森幸一・大橋英寿（1996）「日系人移住地への現地労働者の流入と定着—ボリビアの沖縄移住地の事例—」『東北文化研究室紀要』37。

朴 秀娟 （文学研究科外国人招へい研究員）

森 幸一 （サンパウロ大学教授）

工藤 真由美 （文学研究科教授）